

ロジャーズ理論の変遷と共感的理解の展開

The Changes of Rogers' Theory and the Development of the Concept of Empathic Understanding

小林 孝 雄*

Takao KOBAYASHI

要旨：ロジャーズによる「治療的人格変化の必要十分条件」論文は、ロジャーズ理論における最重要論文とみなされている。しかしながら、この論文は、自然科学的心理学の枠組みで記述することを要請されたもので、必ずしもロジャーズの意図に沿ったものではない。とはいえ、自然科学的心理学で認められることもロジャーズが望んだことでもあった。この論文は、記述されることになった経緯があるのであり、この論文単独では、ロジャーズ理論を正しく理解することはできない。本論考では、この論文の成立経緯と、前後のロジャーズ理論の展開について、主に「共感的理解」に注目し、ロジャーズ理論の正しい理解のために必要な論点を整理する。

キーワード：クライアント中心療法, ロジャーズ, 共感的理解, 体験過程

1. はじめに

ロジャーズ理論において、何より重要な論文は、ロジャーズによる1957年発表の「治療的人格変化の必要十分条件」(Rogers, 1957)である。ロジャーズはこの論文で、治療的(therapeutic)な人格変化(personality change)が起こるために、必要にして十分な条件として、6つの条件を仮説的に提示したのである。提示された6つの条件のうち、セラピストに関わる「自己一致 genuineness」「無条件の肯定的配慮 unconditional positive regard」「共感的理解 empathic understanding」は、中核条件あるいは3条件として、ロジャーズ理論のエッセンスと位置付けられている。

筆者は、これまで、この条件のうちの「共感的理解」に焦点をしぼり、その意味の解明の作業に取り組んできた。その作業の中で、たしかに、この「治療的人格変化の必要十分条件」論文(以下「6条件論文」)は、ロジャーズ理論において重要な論文であるけれども、この論文のみを単独で取り扱っていたのでは、ロジャーズ理論を正しく理解することができないとの思いに至っている。この考えは、すでに書評という形で論じたことがあるが(小林, 2017)改めて、論点を整

* こばやし たかお 文教大学人間科学部

理して論じることが本論考の目的である。

以下、まず「6条件論文」が、どのような事情で書かれたのかを確認し、続けてその母体である「クライアント中心療法の立場から発展したセラピー、パースナリティおよび対人関係の理論」(Rogers, 1959)の位置づけを確認する。さらに、ロジャーズ理論が体系を成し始めた『クライアント中心療法』(1951)を確認し、続けて、American Handbook of Psychiatry (Arieti, ed. 1966)に書かれた、「クライアント中心療法」(Rogers, 1966)の記述を確認する。

2. 「6条件論文」の位置づけ

まず、ロジャーズ理論における最重要論文と言える「6条件論文」の位置づけを確認したい。「6条件論文」の冒頭部で、ロジャーズは以下のように述べている。

数年の間私は、苦しみ悩んでいるひとびととのサイコセラピーをやってきた。最近では私は、その中に含まれていると思われる一般的原則を、その経験のなかから取り出すという仕事に、ますます大きな関心をいただくようになった。私はセラピーの仕事をするときに、私が常に没頭している対人関係というものの、微妙にして複雑な組織のなかに内在しているように思われる、ある秩序とか統一性を発見しようと努力し続けてきた。このような関心の、現段階における具体的結果として、形式的な形で、サイコセラピー、パースナリティ、対人関係—それらは私の経験の諸現象をすっかりつつみこんでいるものであるが—の理論を述べてみたいと思うのである。本論文において、私は、その理論の一つの小さな部分 (one very small segment) をとりあげ、それをもっと完全に説明し、その意味と有用性を探求してみたいと思うのである。(Rogers, 1957/1966, 全集4, p.117. 下線引用者。引用は用語・表現の統一を優先して『ロージャズ全集』からとする。)

引用中の「現段階における具体的結果」というのは、1959年に刊行される「クライアント中心療法の立場から発展したセラピー、パースナリティおよび対人関係の理論」(Rogers, 1959/1967, 以下「1959年理論」と記載する)のことである。この「1959年理論」の刊行は1959年で、「6条件論文」の刊行よりも後であるが、実は「6条件論文」の前に書かれている。上記下線部で述べられているように、「6条件論文」は、「1959年理論」の、一つの小さな部分を取り上げ、発展させたものであるという。したがって、ロジャーズ理論における「6条件論文」の位置づけを正しく理解するためには、「1959年理論」を確認する必要があるだろう。では、その「1959年理論」を確認してみたい。「序論」では次のように述べられている。

ここしばらくの間私は、クライアント中心療法を通じて集まったグループのなかに発展してきている理論について、もっと適切でもっと時代に即した説明を必要とすることを痛感していた。アメリカ心理学会から“アメリカにおける心理学の現状と発展の研究”に関連して、この発展しつつある理論の体系的な説明をするようにという公式な要請がなかったならば、これはよき意図だけにとどまって実現しなかったであろう。(Rogers, 1959/1967, 全集8, p.165. 下線引用者。なお、client, empathyは、翻訳書からの引用の場合は「クライアント」「感情移入」という翻訳書における訳語表記とし、その他は「クライアント」「共感」と表記

する。)

この「1959年理論」は、アメリカ心理学会からの「要請」で書かれたものであるという。さらにこの「要請」に関しては、別の箇所でも次のようにも述べられている。

このアメリカ心理学会の研究へ参加するようにと招かれたとき、可能な限り、独立変数・従属変数という用語を用いて、われわれの立場について理論的な考察を述べるようにと要請された。残念ながらこの用語は私にはピッタリしないのである。(中略) これらの用語は、新しい分野の科学的研究の生ける生理に適しているよりむしろ死体解剖などに適しているように思う。(Rogers, 1959/1967、全集 8、pp.172-173。下線引用者)

「独立変数・従属変数という用語を用いて」という要請から、この要請は、自然科学的な心理学の枠組みでの記述を求められていたと考えることができる。1950年代のアメリカの心理学では、スティーブンスによる「マグニチュード推定法」(Stevens, 1956)が開発され、人間の行動の「測定」が「可能」となり、すでに隆盛していた行動主義の「心の現象を外的に観察可能な行動から推定する」という方向性を増強する状況にあった。測定によって得られた数値を用い、量的に研究する方法は、実験法に代表されるように、当時の心理学が目指すところであった。それは、物理学をはじめとした「自然科学」に加わろうとする心理学が選んだ方向性による。正しい・正しくないの判断は、「自然科学」的枠組みにもとづいてなされる道を選んだのである。アメリカ心理学会が、「心理学」という領域の中で、クライアント中心療法の理論を論ぜよと要請する場合に、できるだけ「自然科学的」枠組みに則ってなすべしとの要請をしたのも無理もないことである。一方のロジャーズの側は、1945年よりシカゴ大学に在籍し、前後して、1944年にアメリカ応用心理学会会長、1946年から1947年までアメリカ心理学会の会長をつとめる。アメリカ心理学会の要請にこたえること、自らのクライアント中心療法の考え方が心理学の領域で認められることに、並々ならぬ意欲を持っていたと考えることができる。「6条件論文」をつつみこんでいる「1959年理論」は、「臨床家」ロジャーズの意図とは必ずしも沿わない枠組みで書かれることを要請されていたものの、心理学の領域で自らの考えが認められるという望みにかなうものでもあり、要請された枠組みで書くことを決心したと考えることができよう。

「1959年理論」は、そのような用語上、記述の枠組み上の制約を与えられつつも、セラピーの体験に含まれる秩序に関する仮説を、自然科学的方法論による仮説検証に耐えるものとして提示したいとして書かれたのではないか。つまり、実際にアメリカ心理学会の会長をもつとめた彼が、心理学の領域に自らの着想を問う良い機会だ、ととらえたと思像できる。そして、アメリカ心理学会の要請に応え、「1959年理論」の公式化を果たし、ロジャーズは自らの着想を自然科学的な心理学研究の検証に問うことができる手応えを強く感じたのではないだろうか。

さて、その手応えに勢いを得て、この「1959年理論」のうちの、特に「A.セラピーの過程が起こるための条件」が、単独で心理学研究の検証に耐えうるものであり、またその意義があるものであるとの考えから、「6条件論文」としてさらに発展させ発表したのではないか。

そうであるとするならば、ロジャーズ理論のエッセンスと位置付けられている「6条件論文」は、ロジャーズ理論全体の体系の中の、実は一部を取り出して発展させたもので、その意味を理解したり検討したりするためには、「1959年理論」の全体を視野に入れる必要がある。また、そ

の「1959年理論」は、ロジャーズ自身「ピッタリしない」用語ないし表現方法の制約のもとで体系化されたものであるから、その理論が意味するところを正しく理解しようとするならば、「制約のない」ロジャーズの記述も参照する必要があるだろう。

3. 態度の「遂行」と「alter ego」—「共感的理解」の原型

では、用語や表現方法において比較的「制約のない」ロジャーズの記述とは何か。ロジャーズ理論がその体系を成し始めた『クライアント中心療法』（Rogers, 1951）を見てみよう。

同書第1章の冒頭で、ロジャーズは次のように述べている。

さらに顕著なことに、クライアント中心療法は、操作的定義と客観的測定に優れ、客観的な立証または反証の過程には科学的な手法とすべての仮説を提起することを義務付けることを強調するという点で、アメリカで発達してきた心理学による影響を受けてきた。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、p.13。下線引用者)

このように、出版時、既にアメリカ心理学会会長を歴任していたロジャーズらしく、自然科学的な心理学を意識していたことがわかる。しかし同時に、第8章「パーソナリティと行動に関する一理論」の結論には、次のような記述もある。

本章は、クライアント中心療法におけるわれわれの経験や研究と首尾一貫している、パーソナリティと行動についての理論を提出しようと努めたものである。この理論は、基本的に現象学的な性格をもち、しかも、一つの説明的な構成概念として、自己概念に大きく依存している (Rogers, 1951/1967/2005、全集8、p.158。)

冒頭のように、自然科学的な心理学を意識していたと述べているが、しかし、その理論体系は、ロジャーズの言うところの「現象学」の立場で構築されていたということがわかる。ヨーロッパ哲学における現象学と、ロジャーズが言うところの現象学は別のもので位置づけるのが適切であるが、もともとロジャーズが自らの臨床経験にもとづいて理論を整理しようとしたとき、おそらくそれは体験している当人の主観の記述を重視していたのであって、ロジャーズのキャリアがアメリカの心理学の領域を意識させ、現象学から自然科学的心理学の方法論や枠組みへと、自ら形成しつつあった理論体系の枠組を、大きく変更したのではない。

さて、「6条件論文」「1959年理論」における記述との関連を検討してみたい。同書第2章「カウンセラーの態度とオリエンテーション」で述べられている内容が、後の“中核条件”と密接にかかわることになる。第2章開始間もなく、次のように書かれている。

もっと正確にいうならば、クライアント中心療法における効果的なカウンセラーは、自分の人格体制に深く内在している一組の理路整然とした発展的な諸態度、すなわち、クライアント中心療法と首尾一貫した技術や方法によって遂行されるあるひとつの体系をなす諸態度、を保持しているといつてよかろう。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、pp.24-25。下線引用者)

おそらく、いわんとする要点を要約するならば、クライアント中心の技術を使用することにより、人は、尊敬 (respect [尊重：引用者補足]) が自分のパーソナリティ形成の結合部であるかぎりにおいてのみ、他人への尊敬を遂行しうるのであり、したがって、その作動哲学 (operational philosophy) が、それぞれの人間の意義と価値とに対する心からの尊敬を感じる方向へとすでに動いているひとは、よりいっそう容易に、この感情を表明するように自分を援助するクライアント中心の技術を同化することができるのである。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、p.27。下線引用者)

この記述から読み取れることは、クライアント中心のセラピストは、人間の意義と価値とに対する心からの尊敬という「態度」を、セラピストの人格に深く内在させており、内在させていることによって、その「態度」を「技術」によって遂行することができる、ということである。つまり、「態度」と「技術」とが区別されて定位されているのであり、「技術」は「態度」を遂行するためという役割を持つと読み取ることができる。そして、この「態度」の「遂行」に関する公式化が以下の記述である。

クライアント中心のセラピーにおける現在の思考の段階では、最も満足のゆく治療関係において生起するところのものを記述しようとする別の企て、すなわち、基本的な仮説が遂行されるされ方を記述しようとする別の企て、がある。この公式化は、カウンセラーが、可能な限りにおいてクライアントの内部的照合枠を身につけること、クライアントが世界をながめているままにその世界を知覚すること、クライアントがみずからながめているままにクライアント自身を知覚すること、そのようにしている間は外部的照合枠にもとづく一切の知覚を排除しておくこと、そして、この感情を移入して理解したことをコミュニケーションすること、それがカウンセラーの機能であるといいたいのである。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、pp.37-38。下線引用者)

この記述は、「1959 理論」「6 条件論文」へとつながる、「共感的理解」(または訳語として「感情移入的理解」も用いられる)の原型とみることができる。そして注目しておきたいことは、ここでは、それは「態度」を遂行する「技術、機能」としての記述だということである。そして実はこのことは、「1959 年理論」にも引き継がれている。「1959 年理論」中、「Ⅲ. 十分に機能する人間についての理論」の項目に、以下のような記述がある。「E-2. 個人の照合枠についての感情移入的理解が完全で、しかもそれが相手に伝達されているような関係によって、この無条件の肯定的な配慮が明らかにいきわたっている時」(Rogers, 1959/1967、全集8、p.244)。つまり、「感情移入的理解」によって、「無条件の肯定的配慮」という態度がいきわたることが遂行されている、と読める。「無条件の肯定的配慮」が「態度」であり、「感情移入的理解」が「技術」として理論の整理がなされていると考えることができる。

「6 条件論文」から抽出され広く知られるようになった“中核条件”(「自己一致」「無条件の肯定的配慮」「共感的理解」)は、3つが「態度」として並列されているようであり、またこれは「態度条件である」とも位置付けられることがある。しかし、その誕生の経緯にさかのぼるならば、「無条件の肯定的関心」という「態度」の「遂行・技術」が「共感的理解」である、と位置付けられていたということを知る必要があるのではないか。

さらに、『クライアント中心療法』では、次のようにも記述されている。

すなわち、クライアント中心のオリエンテーションによって機能している多くのセラピストによって、クライアントの態度“の内部に”たどりつくという、つまり、クライアントの内部的照合枠に入り込むという、この誠実なねらいは、人間の能力を尊重し信頼するというこの革新的な仮説にとっての、これまでに公式化されている最も完全な遂行なのである、と。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、p.47。下線引用者)

カウンセラーは、実際に次のようにいう。すなわち、“あなたのお役に立つように、わたくしは、自分自身を排除するわけです。つまり、普通に話し合っているときの自己をです。一そして、私の力のおよぶかぎり完全にあなたが知覚している世界へと入り込むわけです。ある意味では、私は、あなたのいまひとりの自己 (another self) つまり、あなた自身の態度や感情の今一人の自己 (an alter ego) 一になるわけで—あなたが、もっとはっきりあなた自身を認知し (discern [認める、識別する])、もっとたしかに、しかも深くあなた自身を経験し、もっと有意義に選択する、ひとつの安全な好機 (opportunity) になるわけです”と。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、pp.45-46。下線引用者)

この時点でロジャーズは、クライアント中心の「態度」の遂行として、セラピストがクライアントの「alter ego」になること、と記述していたことは注目したい。(ただし、この「alter ego」の用語、考えは、「1959年理論」や「6条件論文」には引き継がれていない。筆者はこれについて一つの考えを示したことがあるが(小林, 2013)、今後検討が必要な論点であると考えている。)

さて、ロジャーズは同じ章において、セラピストが alter ego となることの心理療法的 (治療的、therapeutic) 機能に関して、次のように述べている。

サイコセラピーは、基本的には、自己の体制 (organization) と機能を取り扱う。自己が直面することができず、はっきりと知覚することができない体験の諸要素がたくさんある。なぜならば、それらの諸要素に直面し、あるいは、それらの諸要素を承認することが、自己の現在の体制と矛盾撞着し、自己の現在の体制を脅威するであろうからである。クライアント中心療法において、クライアントは、作動的・技術的な意味において純粋の (genuine) alter ego [翻訳では「他我」とあるが、誤解を招くと考えるので原語のままとする] —理解しようとするひとつの特質は別として、それ自体の自己を (できるかぎり) 捨て去ったひとりの自己—を、カウンセラーの中に見いだすのである。セラピーを経験することにより、いまひとりの自分によって正確に表明されるが、しかし、情動の複雑さを [取り除かれた] 自分自身の態度・混乱・矛盾撞着・感情および知覚をながめることは、自分自身を客観的にながめることであり、いまや、よりいっそう明瞭に知覚されるすべてのこのような要素をもつ自己を受容するための道を舗装するのである。自己の再体制化や、よりいっそう統合された自己の機能は、このようにして前進させられるのである。(Rogers, 1951/1966/2005、全集3巻、p.54。下線引用者。)

「6条件論文」では、提示された仮説の検証のための操作的定義に重点が置かれているため、

このような心理療法的機序に関する記述はほとんどない。その理由は、「6条件論文」というものが、ロジャーズが要請された記述の枠組みについて「ピッタリしない」と思いながらも、自然科学的心理学を意識し、「心理学的な公式化」の方向性が強く出ているためであろう。『クライアント中心療法』で述べられていた、「共感的理解（感情移入的理解）」がなぜ心理療法的な人格変化を引き起こすのか、については、「6条件論文」では述べられていないのである。この引用に述べられているとおり、「共感的理解」は、自己の再体制化、より一層の自己の統合へと前進する好機を提供する役割を持つ。これが「共感的理解」の心理療法的機能、意義であり、これは「6条件論文」だけを読んでいては理解できないことである。

『クライアント中心療法』と「1959年理論」との関係についても見てみよう。「1959年理論」の原型の一つである、『クライアント中心療法』（1951）第8章「パーソナリティと行動に関する一理論」の第16、17命題は次のとおりである。

16) 心理的適応は、自己概念が、象徴のレベルにおいて、有機体の官能的・内臓的経験をごとごとく自己概念と首尾一貫した関係に同化しているか、もしくは同化するであろうときに存在するのである。(Rogers, 1951/1967/2005、全集8、p.132。傍点省略。)

17) 自己構造に対して基本的になんらの脅威も包含していない条件下においては、自己構造と矛盾対立する経験は、知覚され検討されるようになり、また、自己構造は、そのような経験を同化し包含するように修正されていくであろう。(同、p.138。傍点省略。)

この内容は、「1959年理論」にも引き継がれている。「最適なサイコセラピーの目標と同義」とされている「Ⅲ.十分に機能する人間についての理論」には以下のようにある。

F 3. すべての象徴化は、経験的な資料の許す限り正確になるであろう。

4. 彼〔彼女〕の自己構造は、経験と一致するであろう。

5. 彼〔彼女〕の自己構造は流動的なゲシュタルトになり、新しい経験を同化する過程において柔軟に変化するであろう。

(Rogers, 1959/1967、全集8、p.244。傍点省略。)

セラピストの「態度」の「遂行」としての「共感的理解」が、クライアントに可能にしようとする前進が向かうのは、これらの理論に描かれているような自己である。体験の正確な象徴化に向かい、そのような正確な象徴化によって自己が再体制化され、またそのような再体制化された自己がさらに体験の正確な象徴化を可能にし、自己体制も柔軟に変化していく。このような自己であることが、心理的適応につながるのだという。これが、ロジャーズ理論における人格変化の機序であり、この変化を可能にする機会を作り出すことがセラピストの「共感的理解」の機能なのである。これは、「6条件論文」には述べられていないことであり、「1959年理論」と『クライアント中心療法』を合わせて読むことで理解できることである。そして、これこそが、ロジャーズ理論のエッセンスにたどり着く道であると考えられる。

4. 「体験過程 experience」概念と現象学への回帰

「6条件論文」を正しく位置づけ、理解するために次に必要な作業が、「6条件論文」以降ロジャーズが自らの理論をどう展開させていったのか、確認することである。

「1959年理論」「6条件論文」にて、自然科学的心理学での検証に耐える手応えを得たロジャーズは、大規模なリサーチプロジェクトを実行する。いわゆる「ウイスコンシン・プロジェクト」である。しかしこのプロジェクトで、ロジャーズの期待していたような研究結果は得られないことになる。おそらく、心理学領域で認められる結果を示すことを目論んだロジャーズは、大きなショックを受けたことと思われる。この後、アカデミックな世界から退き、エンカウンター・グループの実践や、心理療法の領域に限定されない広い領域にPCAの適用を図ることに勢力をそそぐことになる。その著作にも、自然科学的心理学の指向性が薄れていく。

また、ロジャーズ理論の展開に、決定的に重要な影響を与えたのが、ジェンドリンによる「体験過程 experience」概念の提出である。「体験過程 experience」概念は、「1959年理論」「6条件論文」発表時には提出されておらず、それらの記述には反映されていない。

「6条件論文」以後について、全集15巻所収の、American Handbook of Psychiatry (Arieti, ed. 1966)に書かれた、「クライエント中心療法」(以下、「1966年論文」)を確認してみることにする。(同論文では、ウイスコンシン・プロジェクトでのクライエントの一人、Mr. Vacの事例が示されている。)

(1) 体験の即時性の強調

「1966年論文」では、セラピー的な動きが起こる「三つの条件」のひとつに、「敏感に正確である感情移入的理解 a sensitively accurate empathic understanding」という表現で、「共感的理解」があげられている。「6条件論文」からの変化は、「敏感に正確」という表現が付け加わっている点である。さて、その「共感的理解」の説明は次のとおりである。

正確な共感的理解とは、セラピストがクライエントの宇宙のなかに完全に気持ちよく入っているとすることである。それは、“今ここ”のなか、今ここでの現在 (immediate present) のなかにある、瞬間瞬間の感性性なのである。それは、クライエントの私的な個人的な意味づけの内面的世界をあたかも自分自身のものであるかのように感じとることであるが、その“あたかも……のように”という性質を絶対に失わない、ということである。クライエントの今の存在 (client's being) に正確に敏感であることが、セラピーという瞬間瞬間の出会いのなかで最も大事なことである。(Rogers, 1966/1967、全集15、p.264。下線引用者。)

基本的には「6条件論文」の記述と重なるが、「瞬間瞬間」を強調している点、「6条件論文」や「1959年理論」が目指していたような、心理学的仮説検証を指向していない記述である点に注目したい。また、心理療法的意義についても、以下のように記述されている。

感情移入的理解は、それが正確にまた敏感に伝達されるときは、クライエントがその内面の感情、知覚、および個人的意味づけをもっと自由に経験することができるために、決定的に重要なものであると思われる。彼〔彼女〕がこのようにその内面の体験過程と接触を保って

いるときには、彼〔彼女〕は、自分の経験がどの点で自己の概念とずれているのか、そしてその結果どこで自分がまちがった概念で生きようとしているかが認識されるのである。この不一致の認識は、その解消への第一歩であり、そしてこれまで拒否していた経験を取り入れるように自己の概念を改訂するための第一歩なのである。このことは、変化が可能となり、自己と行動のより完全な統合が始まる、主要なひとつのかたちなのである。(Rogers, 1966/1967、全集 15、p.264。下線引用者。)

「共感的理解」がもたらそうとする変化は、上記 3. の最後に述べたように、「体験の正確な象徴化に向かい、そのような正確な象徴化によって自己が再体制化され、またそのような再体制化された自己がさらに体験の正確な象徴化を可能にし、自己体制も柔軟に変化していく」という、『クライアント中心療法』『1959 理論』におけるパーソナリティ理論、セラピーの理論で述べられていた内容と、基本軸は変わっていないと思う。しかし、ジェンドリンの「体験過程」の概念化によって、正確な象徴化という内的なプロセスがいかなるものかがはっきりと描き出されたことにより、「瞬間瞬間」の体験、体験過程にまさに今触れていることの重要性、すなわち体験の即時性の重要性が記述に盛り込まれている。このことにしたがってセラピスト側にも、「瞬間瞬間」の「正確な感性」が求められることになったのである。

(2) 遂行の技術から態度への取れん

そして、「6 条件論文」以後をはっきりと特徴づける以下のような記述がみられる。

クライアント中心の考え方が、“感情の反映”と“内容の繰り返し”の相違について細かな関心をもったことから離れ、またクライアントの照合枠の中に入るという技術的問題を中心になとらわれとしていたことから離れて、セラピストはその関係のなかで彼〔彼女〕の全人間を用いるというもっとも広い関心に発展してくるにつれて、個々のセラピストの間の技術の上の大きな格差が生まれるという方向に動いてきたのである。(Rogers, 1966/1967、全集 15、pp.268-269。下線引用者。)

『クライアント中心療法』(1951)において、態度の「遂行」という、技術的機能的位置づけとして公式化され始めた「共感的理解」の「照合枠の中に入る」という側面は、重視されなくなっていることがはっきりと述べられている。これはいわば、クライアントの「alter ego」になるという「遂行」から、全人間としてのセラピストの「being」・ありよう・態度への転換である。もはや「6 条件論文」のみを参照しては不十分である。

(3) セラピスト自身の体験過程に触れることの強調

さらに、「6 条件論文」以後の展開として重大なことが、セラピストの「感じ」の利用について述べられていることである。統合失調症と診断された患者との接触から見出したこととして、ジェンドリンの文献を挙げたうえで以下のことが記述される。

それゆえ、もしそこに関係というものが必要であるならば、セラピスト〔Th〕は Th 自身の感情をそこに呼び出すことが必要になってくるのである。患者が何も言語化しないときに

は、セラピストは少なくとも、Th 自身のそこに流れている感情の流れ—患者に対する Th 自身の関心、関係ができてほしいという Th の希望、その瞬間に患者の中に起こっていることについて Th の想像しているもの—を、暫定的なかたちでしかも強制することなく、伝えることができるであろう。

クライアントまたは患者とともにあるためのこの新しいあり方は、セラピストに対して、Th 自身のなかに感じられている体験過程の推移しつつある流れを高度に意識していることを要求する。患者が患者自身の感情を表現するときには、敏感なセラピストは、Th の経験的意識が患者の意味づけに対する感情移入で満たされていることに気づくであろう。しかし患者が沈黙しているときには、セラピストは、Th 自身の体験過程に直接的に照合し、そこに見いだされる意味を伝えることができる。そしてここでもまた、いやしくも Th が敏感であるならば、これらの意味のなかには、必然的に患者もその関係も含まれているであろう。このように、Th 自身の感じている体験過程に潜在している意味を表現することによって、クライアント中心のセラピストは、意味深い関係にいたる橋をかけることができるのである。セラピストは、意味を表現するための拠りどころとなる照合点として Th の体験過程を用いるのである。(Rogers, 1966/1967, 全集 15, pp.269-270。下線引用者。)

セラピスト自身の体験過程に触れることが、はっきりと述べられている。もちろん、これにはジェンドリンの仕事が強く影響していることは間違いない。そしてこの記述の後、「共感的理解」がセラピストの本当の仕事の予備的なものではなく、セラピーの全過程を通じてはじめて終わりまでクライアントの現象の世界にとどまっていようとする自体が重要であると述べる(同、pp.272-273)。そしてこの節を、「このようにセラピーのなかでクライアントの現在の現象的経験に専心に焦点を合わせるといことが、「クライアント中心的」という言葉の意味なのである」(同、p.274)という言葉で締めくくっている。ロジャーズの現象学への回帰宣言ともとれる記述である。

『クライアント中心療法』では、セラピストが、脱個性的な「alter ego」となることが、態度の「遂行」として定位された。これが、自然科学的心理学への指向によって、「1959年理論」[6条件論文]における、「共感的理解」へと展開し、仮説検証に耐えうる命題へと整理されていく。しかしながら、ウィスコンシン・プロジェクトの挫折と、「体験過程」概念の提出によって、ロジャーズが理論を着想した当初の現象学的立場へと回帰し、「遂行の技術」としての「共感的理解」ではなく、セラピーの全過程を通してセラピストの態度、ありようとしての「共感的理解」へと展開していったと考えることができるのではないか。また「セラピーという瞬間瞬間の出会い」の意義がはっきりと述べられており、のちにエンカウンター・グループの実践を経て、「共感的 empathic」という表現で、セラピストのありようとしての共感的理解がはっきりと強調されるようになる 1975 年の論文 (Rogers, 1975) につながる、後期ロジャーズ独自の「共感的理解」の展開の方向性が見て取れるのではないだろうか。

文献

小林孝雄 (2013) ロジャーズによる「共感的理解」の記述の検討—「知覚」から「感じる」、「内的照合枠」から「私的な世界」へ—。文教大学大学院臨床相談研究所紀要、18、pp.29-37。

- 小林孝雄 (2017) ロジャーズの共感的理解の展開—「6 条件論文」までとその後—。人間性心理学研究、34(2)、pp.159-168.
- 岡村達也 (2012) empathic understanding の origin—その rationale としての alter ego 未公刊
- Rogers, C. (1951) : *Client-centered therapy: Its current practice, implications, and theory*. Houghton Mifflin. (友田不二男 (1966) サイコセラピー ロージャーズ全集 3 岩崎学術出版社。伊藤博 (1967) パースナリティ理論 ロージャーズ全集 8 岩崎学術出版社。保坂亨・諸富祥彦・末武康弘 (2005) クライアント中心療法 岩崎学術出版社。)
- Rogers, C. (1957) : The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103. (伊藤博 (1966) サイコセラピーの過程 ロージャーズ全集 4 岩崎学術出版社。)
- Rogers, C. (1959) : A theory of therapy, personality, and interpersonal relations, as developed in the client-centered framework. In Koch, S. (Ed.) *Psychology: A study of a science. Vol3. Formulations of the person and the social context*. McGraw-Hill. 184-256. (伊藤博 (1967) パースナリティ理論 ロージャーズ全集 8 岩崎学術出版社。)
- Rogers, C. (1966) : Client-centered therapy. In Arieti, S. (Ed.) *American Handbook of Psychiatry*. New York: Basic Book (伊藤博 (1967) クライアント中心療法の最近の発展 ロージャーズ全集 15 岩崎学術出版社。)
- Rogers, C. (1975) : "Empathic: an unappreciated way of being" *The Counseling Psychologist*, **5**(2), 2-10.
- Stevens, S. S. (1956) : "The direct estimation of sensory magnitude—loudness. *American Journal of Psychology*, **69**, 1-5.

